



4月号

ひだまり

今月のエッセー

地に足をつけて



冬の寒さも何処へやら、気温も暖くなり、季節はすっかり春です。

私が曹洞宗総合研究センターに入所して、二回目の春が訪れました。

花粉症を患っている私は、毎年この時期になると、目のかゆみとダムが決壊したのかと思うくらいの鼻水の激流で、ティッシュペーパーの山が築かれます。

ティッシュペーパーが木材から出来ていることを考えると、環境に良くないなと思いつつ、体調の悪さも相まって気分が晴れない日々です。

しかし、この時期は悪いことだけではありません。気持ちを切り替えるきっかけ

編集後記



入学シーズンとなり、あちらこちらに初々しい新入生の姿をみかけるようになりました。その姿を眺めていると、出不精の私も外に飛び出し、何か新しいことを始めたいという気持ちになります。

そこで今年度、私が挑戦したいと考えているのは音楽鑑賞です。これまで生演奏にほとんど縁のなかった私。自分の世界を広げるためにも、クラシックコンサートに出かけてみようと思います。そこではどんな感動が私を待っているのでしょうか。今からドキドキです。

新入生に新たな一歩の後押しをしてもらおうこの頃なのです。◆竹村信彦

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗事務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

けとして、新年度に対して考え始めるという重要な側面があります。

因みに昨年度のこの時期、自分はどんな心境であったのか・・・。

それは、ただ単に「期待」でした。

(仏教の勉強が出来る！)

(色んなことが知りたい！)

など、新たに始まる研究所生活に対して、知的探求心にこころ躍らせていたことを思い出します。

でも、今年度は違います。言葉で表すとしたら、「地に足をつける」でしょうか。

昨年度は、兎に角、知的探求心に任せて短距離走者の如く全速力で走っていた状態で、こころ休めることなく、どこかで無理をしている自分がいました。

陸上選手が無限に走り続けることが不可能なように、常にエンジン全開だといつかはガス欠になってしまいます。

そこで、木々が根を張り足場を固めて揺らがないように、私も落ち着いた姿勢で一つ一つのことを丁寧に。時には立ち止まって、ものごとを整理する。そんな余裕を持っていきます。今年度もどうぞよろしくお願い致します。◆田中仁秀

仏教のことば

「我慢」

「我慢」という言葉は「辛抱すること」とや「耐え忍ぶこと」という意味であり、普段私たちが日常的につかっている言葉です。

もう一つ似た言葉に「自慢」があります。この言葉は「自分で自分に関係の深い物事を褒めて、他人に誇る」という意味です。

「我」と「自」どちらも自分のことを表わしているのに何故意味がまったく異なるのでしょうか？

実は「我慢」はもともと仏教の言葉で、煩惱を表わす「七慢(思い上がりの心を七つに分類したもの)」の一つなのです。本来の意味は「自分と

いう存在に固執し、自分を優れていると見て、他人を軽視すること」。つまり、「我慢」と「自慢」は似たような意味だったのです。

それから、「我慢」は本来の意味が転じて「我を張る」「強情」という意味でつかわれるようになりました。

我が強い人、強情な人というのは、案外自分に自信がないにもかかわらず、強気な態度をとったりするものです。そのような態度は人に弱みを見せまいと耐え忍ぶ態度に見えることから今日つかわれている「我慢」

の意味になり、「自慢」とは異なるようになったのです。◆國生徹雄



よろしくお願ひします！

新メンバー紹介



伊藤正法さん
いとうしょうぼう

出身地…秋田県
趣…味…釣り、美術館巡り
座右の銘…自信は成功の第一の秘訣である



はじめまして。私は美人の多い県で知られる秋田県の大仙市という所が出身地です。

幼い頃よりお寺で過ごし、夏のお盆の棚経など、年間を通して様々な仏事に触れ、お檀家さん達と触れ合ってきました。また、大学に進み学問を修め、修行道場では生きた仏様の教えを学んで参りました。今までは自分のためでしたが、これからは多くの方のために、学ばせて頂いた仏様の教えをお伝えして参りたいと思います。

ルンビニ合掌苑の皆さんとご縁を結ばせて頂き、多くの貴重なお話を聞かせて頂ければ幸いです。どうぞ、よろしくお願ひ致します。

私のたからもの

『相田みつをカレンダー』

私のたからものは、相田みつをさんの日めくりカレンダーです。この方は詩人で、平易な詩を独特の書体で書いた作品で知られています。禅を熱心に学ばれたことでも有名で、その作品にはとても共感させられるのです。

「その時 自分ならばどうする」

これは、カレンダーに使われている私の大好きな言葉の一つです。相田さんは他の誰かに向かってではなく、自分自身に問いかけるようにして詩を作ったと言われています。何にも飾らない、素直な自分への戒めの言葉。そんな言葉だからこそ、私の心に強く響き、元気を与えてくれるのかもしれない。

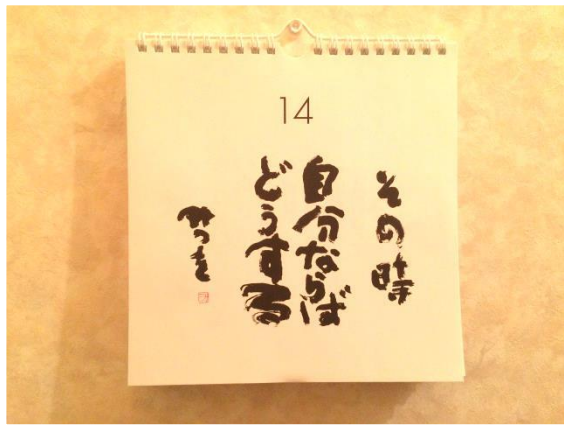
「他人ごとにせずに、

自分のことのように考え、
具体的に行動する」

そんな相田さんの人柄が見えてくるようです。

毎朝、家を出る前にその人柄にふれ勇気をもたらしている、そんな私なのです。

◆ 竹村信彦
たけむらしんげん



ひだまり書房



『夢、死ね！』

～若者を殺す「自己実現」という嘘～
著 中川淳一郎

「夢を持って!」、「夢は声に出して語れ!」こういった言葉をテレビ、雑誌等でよく耳にします。そのお陰か「私には夢があります!」という人と、「夢なんか無い」という人では、多数が前者を支持するでしょうし、むしろ後者は虚無的な人と見られる気さえします。著者はそんな夢を礼賛する風潮が、あまりに大きな夢を胸を張って追ってしまう、現実無視ともいえる夢想家を輩出しているのだと批判しています。

正直、内容には結構乱暴な論調が目立つと思いますが、前述の如く「これは善い、これは悪い」といった具合に、物事に本質的に善か悪の二元的価値があるかのように語られる風潮には私も疑問を感じます。ある価値観に従っていないと異端とされしてしまう…。それに怯えて、心無く大勢に合わせる…。

◆ 田代浩潤
たしろこうじゅん